

近藤康太郎

朝日新聞記者



Ōgai Mori



Johann Wolfgang von Goethe

「あらすじ」だけで
人生の意味が
全部わかる
世界の古典13



Karl Heinrich Marx



Soseki Natsume



Anton Pavlovich Chekhov



William Shakespeare



Atsushi Nakajima



Fyodor Dostoevsky



François Rabelais

ALIBRARIUM

常州大学図書館
藏书章

「あらすじ」だけで人生の意味が
全部わかる世界の古典13

講談社+α新書
733707

近藤康太郎

1963年、東京・渋谷に生まれる。1987年、慶應義塾大学卒業後、朝日新聞社に入社。川崎支局、学芸部、「AERA」編集部、ニューヨーク特派員などを経て、2010年から文化くらし報道部。音楽、文学、映画、美術を中心に、社会事象一般を広く取材。新聞の朝刊文化面や読書面、音楽面に記事を書いたかわら、「AERA」「週刊金曜日」「WEBRONZA」などにも連載。

著書には、ベストセラーになった「朝日新聞記者が書いたアメリカ人「アホ・マスケ」論」「朝日新聞記者が書けなかったアメリカの大汚点」(以上、講談社+α新書)、「リアルロック」(三一書房)などがある。

講談社+α新書 212-3 C



「あらすじ」だけで人生の意味が全部わかる世界の古典13

近藤康太郎 ©Kotaro Kondo 2012

2012年11月20日第1刷発行

- 発行者——鈴木 哲
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部(03)5395-3532
販売部(03)5395-5817
業務部(03)5395-3615
- カバー写真——講談社資料センター
デザイン——鈴木成一デザイン室
カバー印刷——共同印刷株式会社
印刷——慶昌堂印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

Printed in Japan

ISBN978-4-06-272781-5

目次●「あらずじ」だけで人生の意味が全部わかる世界の古典 13

まえがき——人類の英智がつまっている人生のテキスト 3

序 章 古典で知る人生の自由

古典を読んで得る現世的な利益	18
馬鹿でもできる古典の処世術	19
古典を読んでも怒られる新聞社	20
人と競争しないことを覚えると	22
取引先や取材先が喰いつく話題	25
古典は「すべらない話」の宝庫	27
「忙しいから本を読まぬ」の馬鹿	28
古典で人生の素振りをすると	30
ホワイトカラーには必須の古典	32
自分が自由でいるために	34

第1章 愛することのすべてを知る『決闘』

厭になった女と一緒にいると男は 38

恋は必ず三年で冷める 40

「人生の検察官」に満ちた世界 42

妻の棺桶を準備して出費の計算 44

妻の目に見える自分を想像したか 46

純愛ブームの手前勝手 48

もう愛せなくなった妻のために 51

第2章 笑いと人生の楽しみについて知る『ガルガンチュワとパンタグリユエル物語』

亡命に失敗したキューバ人の笑い 56

間抜けすぎる話を延々と 57

言葉のただ漏れギャグとは 58

生きてさえいれば、死にはしない 60

死だって一度きりなんだ 61

やってやって「やりまくれ」 62

世界は最初から不公平なもの 64

幸福だから笑うのではない 66

不安と閉塞の時代だからこそ 67

第3章 病氣と健康と死の意味を知る『山月記』

死の淵をのぞき込んだ瞬間 72

「泣ける小説」では泣けない 73

ブライドが高すぎる者の悲劇 74

だれもが「虎」を飼っている 75

自分の才能を開花させられぬ恐怖 77

才能は使わないと復讐する 78

自分の骨を知れ、しゃぶりつけ 79

引きこもりの人生なんて不可能だ 80

「おれはオレでなくなつた」 82

余生が一カ月のときどうするか 84

表現する欲びだけは生き残る 85

第4章 出世の意味と人生の目的を知る『戦争と平和』

出世競争をする理由 90

なぜみな他人に愛されたがるのか 92

出世欲の正体とはなにか 93

空は、走らない 97

ナポレオンの虚栄心が浅く思える 98

絶対的な幸福と自由に至る道 100

出世競争で得る自由の大きさは 102

第5章 家族を殴るといふことの意味を知る『悪霊』

父にいわれた「殺してみろ」 106

隠されていた悪の秘密の鍵 113

だれの中にでもいる悪魔を描いた 108

家族を殴ったとき相手の顔を見る 115

連合赤軍やオウム真理教も 111

溺れ死ぬ寸前に読む本とは 116

第6章 怒りとプライドの関係を知る『大尉の娘』

怒りで解決することはあるのか 122

プライドを捨てて生きるべきか 130

怒りに効き目のある本とは 124

あらがえない宿命は受け入れる 132

万能の慰め文句の宝庫 125

不器用者の生き方とは 133

正直よりは達者がいい 127

嘆くな怒るな、軽蔑し抜け 134

「坊っちゃん」たちの研究 128

命あるうちは惜しみなく生きる 136

第7章 人にいえない罪を犯したときに何をすべきかを知る『舞姫』

本当のことを告げてから死んだ人 140

許すべからざる罪人とはだれか 141

明治の古典を今読む意味 144

自虐ネタばかり書いた鷗外の心 145

鷗外の二重生活の理由 148

すべての芸術は自己弁護だ 151

たとえ自己弁護でも生き残れ 153

第8章 世間と自分の適正な位置関係を知る『吾輩は猫である』

異論を許さない空気の出所 156

世の中が一色になるときの居場所 157

自分の居場所がないときは 159

戦争中に滑稽話を書く凄み 163

世間が熱狂しているとき何をする 164

現代の日本を見透かしている作品 165

死のことばかり考えていた漱石 167

漱石が描く女たちに会おうと 169

不愉快な世の中を生きるために 171

第9章 他人そして自分への憎しみへの対処法を知る『嵐が丘』

憎悪の喜びとは 174

はげしい憎悪は連鎖する 176

恋の憎しみを描いた最高傑作 178

生きているかぎり、憎み続ける男 179

奴隷は憎み、王は許す 180

忘れるための特效薬がある 182

許すのはだれのためか 184

許すときも憎しみを捨てられない 186

復讐のあとはどうなる 187

許すのは、学ばなければできない 188

第10章 人間の運のすべてについて知る『マクベス』

人生には運命の好機が二回来る 192

人生の大事がすべて書かれた古典 194

運命をささやかれると人間は 195

自分の欲望は他者の欲望である 196

望みを遂げてもすべてが無駄ごと 198

運命を信じ込むと悲劇に終わる 200

悲劇に死ぬか、喜劇を生き抜くか 201

不運？それがどうした、風が吹く 203

第11章 年をとることの意味をすべて知る『ファウスト』

人生というのは、一口に言ったら 208

どうせ世の中の悩みは色と欲 209

老人に約束するおいしい生活とは 210

若さを取り戻し美女に恋する願望 211

財政難を一挙に解決する妙策 213

完全な幻想としてのカネ 214

ファウストがつかんだ老後とは 215

日本の老後の不安感の正体 217

最期の言葉は「時間よ、止まれ」 219

第12章 働くことの意味をすべて知る『精神現象学』

最初の給料で靴下を買った理由 226

仕事なしで生きていけない動物 227

他者がいてこそ「自我」 228

他者を支配しようとする自己意識 229

生きるのに必要な他者の「承認」 231

主人と奴隷が逆転するとき 232

主人は堅牢な身分ではない 234

労働のみが自己承認の契機に 235

どんな仕事も楽しみに変えられる 237

自分で自分を認めてあげると 239

第13章 資本主義社会での正しい生き方を知る『資本論』

世界の当然を疑え 242

これぐらいの賃下げは当たり前？ 250

だれも問題にしないことを問題に 243

非正規雇用は奴隷と同じか 252

なぜ貨幣が特別なのか 244

恐慌を脱するには戦争しかない 254

道具が逆に人間を牛耳る現実 246

古典を読むことは人間を読むこと 255

労働力という商品の特殊性 247

あらゆるものは疑われるべきだ 257

資本主義の巧妙なトリック 248

あとがき——馬鹿のための古典読書術五カ条 260

ベリタス・パブリッシング

「あらすじ」だけで人生の意味が
全部わかる世界の古典13

講談社+α新書
7327807

まえがき——人類の英智がつまっている人生のテキスト

古典を読まんやつは、あほうである。

新聞、雑誌、ネットで仕事をしてきて四半世紀。つくづく、そう思うようになった。

地方支局に始まって、家庭面、社会面、文化面、国際面、ニューヨーク支局、週刊誌に携帯電話のニュースサイトなんてのもあった。さまざまな仕事をさせてもらい、随分いろんな人にも会った。

新聞、雑誌記者の唯一いいところは、当代一流の作家、歌手、俳優、政治家、経営者から、犯罪者変質者変態者まで、だれとでも、とはいわないが、かなり大きな振れ幅の人たちに会えることだ。

首相になる前の小泉純一郎こいずみじゅんいちろうと隣同士に座って話をした。ブルックリンのおつかない黒人ギャングと一緒に、彼らの縄張りめしで飯を食ったこともある。ミック・ジャガーにもキース・リチャーズにも会った。ステイービー・ワンダーなんぞ、筆者のためだけに即興そつぎようでハーモ

ニカまで吹いてくれた。一方で、売れない詩人に一晚中引つ張り回され、場末の飲み屋の二階で雑魚寝ざごねをしたり（もちろんぜんぶおごらされた）。

若造だつたくせに、社会人になつた初しょ端はなから、超一級の本物にも、ろくでもない偽物にせものにも、たくさん会つてきた。

そのうち、気付いたことがあつた。その人が善人であろうと悪人であろうと、そんなことはどっちでもいい。ただ、本物、大人物、懐ふところの深い人、他人を自分の磁場に引き込むような力のある人は、みな、本を読んでいた。あるいは、かつて大量に読んでいた。それも、ベストセラーなんかじゃない。「そんなの、読んでるんですか？」と驚く、古くさい本、つまり古典を読んでいた。ほぼ間違いのない確率だ。

急いで付け加えると、「だからぼくも、一廉ひとやすみの人物になるためには古典を読まなければならない」「教養人にならなければならない」なんていいたいのではない。

もうちょっと、せこいことだ。残念ながら。

古典を読まないのは、損である。人生の大きな損失である。そう確信しているのである。確信が年々、強くなつてくるもんだから、自分でこつそり思うだけでなく、こうして人様に伝えたくなつた。勝手な使命感を持つに至つた。

現代に生きるビジネスマン、ビジネスマンこそ、古い名作を読まなければならない。

それは、なにも立派な人になるため、なんかじゃない。そこに、「現世的利益」があるからである。

再びいう。古典を読まんやつは、あほうである。

ここでまた急いで付け加えると、古典を読まないのは「馬鹿」なんじゃない。「あほう」なのだ。

大阪のバーでバーテンダーに聞いたが、関西でアホとは褒め言葉だそうじゃないか。愛情表現だと聞いた。ここでいう「あほう」もそういう意味だ。お人好しとか善人とか、そういう意味で使っている。

古典には、教養とか人格錬成れんせいとかいう、崇高な目的ではなくて、もつと下世話な「ご利益やく」がある。この世を生き抜くためには必須の処世術である。

古典とは、何十年、何百年に一人といった大天才が、ときには一生を費やして書いたものだ。「これを書かなければ死ねない」と、心で叫んで残した、命の精髓だ。

加えて、古典には読者もついている。現代のベストセラーのような、百万部売れました、といったケチな話じゃない。何百年にもわたり、違う時代、違う国の、何十億人の読者が読み継いできた。だから、読みだって深く、カラフルになっている。こうも読めるし、あかも読める。読みかたの可能性が、ほぼ無限だ。

というより、古典こそ、現代の問題意識に引き寄せて、「読みの可能性の中心」においてページをめくるべきものだ。古典は偉大な作者が書いただけではない。歴史上、「偉大な読み手」も数多くいた。偉大な読み手が、今までにない読み方を提示し、書物の命を何度も再生させて、それで生き残ってきた。作者一人ではない、何十億人もの叡智^{えいち}がつまっている、人生のテキストなのだ。

もうひとつ加えると、それが安いことから、たまらない。せいぜい数百円で買える。仮にいま絶版になっていても、たいていすぐに復刊される。それに、古本市場にもたくさん出回っている。手に入れやすい。

人類の歴史と叡智がつまっている本が、数百円で、わりあい簡単に手に入る。損得勘定^{かんじよう}からいって、「大変おトク」だという効能を持っている。これをほうっておくなんて、お人好しすぎる。

だから、「古典を読まないのは、あほうである」という意味は、現世利益に興味がなくなるとなるとまあ欲のない人なんだ、お人好しだろう、とそういう意味でいつている。お人好しというだけならまだいいが、あほうもこじらせると、他人の自由を圧迫する凶器になる。自分だけでなく、他人をも生きにくくさせる。

自分が自由でいるために、他人を圧迫しないために、生きにくい今の世界を、それでも生